

帝国主義の岩 パレスチナに連帯を!!

〈 III 〉

楨 渡

アメバス辞任と
袋小路で迷走す
るロードマップ

権にはあつた。

アッバス辞任と
袋小路で迷走す
るロードマップ

パレスチナの中ではいわゆる稳健派と目されてきた自治政府首領アッバスが、9月6日就任以来4カ月余りで辞任に追い込まれたことは、パレスチナ新和平案（ロードマップ）の推進にあたってアラファト自治政府議長を排除し、議長に代わる交渉相手として事実上、自らの圧力で同首相を擁立した米国にとって、誤算と政策の挫折ともいえる。

すでに6月4日のアカバ合意以降、暗礁に乗り上げるばかりでまったく道筋の見えないロードマップは、アッバスと「うパートナー」の靈巣で「占領下の独立」というトリック自体が破局を迎えるつあるのだ。

泥沼化の様相を呈しているイラクの占領政策ばかりか、パレスチナ新和平案ロードマップが袋小路に入つて迷走し赤信号がどもつて見直しを迫られる事態になれば、米大統領政権の中東政策そのものが根幹から揺らぐほどの深刻な打撃になることは間違いない。

7月末、訪米したパレスチナ首相のアッバス、イスラエル首相のシャロンと会談した米大統領ブッシュが、パレスチナ側にはほとんど成果を与えず、イスラエル寄りの立場を一層明らかにしたことでのアッバスの政治的立場は決定的に弱まつた。しかもイラクの占領政策が見直しを余儀なくされている最中で、深刻化するパレスチナ問題に踏み込める事情がアッシュ政

ガサ地区とヨルダン川西岸地域とは完全に分断されてしまっている。エルサレムは、民族浄化が進められユダヤ人植者によって完全に囲まれてしまった。イスラエルは、「オスロ合意」(93年のパレスチナ暫定自治合意)によって世界中をだました。この合意によって平和がもたらされるとたわれたが、イスラエルによる占領支配が、法律的にも経済的にも整えられることになり、事實上のアパルトヘイトが生まれた。ヨルダン川西岸の自治区は、それぞれの街がまだら模様のようにならんとしている。

第2次インティファーダ(00年9・28)が始まつてから事態はどんどん悪化し、占領下でイスラエルは暗殺や逮捕・投獄を繰り返して家屋の破壊などの人権侵害を行ってきた。このようなかつてない事態に、私たちは国際社会が何らかの反応を示してくれるだうと期待した。だが、様々な国際的な人権団体の動きや報告にもかかわらず、(イスラエルを擁護する)アメリカが反対すると、国際社会は沈黙という態度を取ったにすぎなかった。こうしてイスラエルの戦争犯罪は黙認されてきた。

昨年、ヨルダン川西岸のジエニンにおいてイスラエルによる最大の戦争犯罪(虐殺)が行われた。しかしこの時も国際社会は注

闇の向こうにあ
る希望を見よ！

資本主義は世界中のあらゆる地域に押し入り、人々を搾取し抑圧し暴利をむきを再生する思想的なモーメント（契機）をつかみ取る多国籍化した独占資本による軍事力（武行使＝侵略戦争）をも伴った世界大の支配（グローバリゼーション）に対し、最も犠牲を被ってきた虐げられし者たち（アロレタリアート）は、全世界で怒りと反抗の火——繰り返される蜂起（サスティ・サッセン）——を燃え上げさせ、国境を越えた国際的な連帯行動によってカウンター・パワーを成長させているのである。

G8サミットやWTIに対する反グローバリズムの闘い、アメリカのアフガニスタンやイラクへの侵略戦争に対する反戦運動のかつてない全世界的規模の拡がりこそ、それを証明していく。

21世紀は、資本主義の「耐用年数」が切れる時代になるのは間違いない。我々は、こうした資本主義のいわば断末魔といふ時代に立ち会っている。だが、「ポスト資本主義」、それは、あくまでも「新帝国主義」の世界支配を打ち碎くプロレタリア革命についてこそ到来するのである。

前世紀末、89～91年のソ連・東欧の旧体制（スターリン主義型の国家体制）の崩壊は、確かに旧来の「社会主義」に対する人々の信

頼を地に落としたといえる歴史的な出来事であった。しかし、このスターリン

主義（ナショナル・ボルシ

エヴィズム）の歪みに真正面から向き合い、「負の歴史」から教訓を学ぶことに

よりて、真に共産主義運動を再生する思想的なモーメント（契機）をつかみ取るうとしている我々は、あえてそこに「闇の向こうにあ

る希望」を見る。

全世界の虐げられし者、搾取され抑圧され虐げら

れている人たち、資本の成長させているのである。

くびきから解放を求めてい

る人々、世界や社会のラティカル（根本的）な変革を

望む人々がいる限り、我々は、帝国主義・資本主義の争に対する反戦運動のかつてない全世界的規模の拡がりこそ、それを証明していく。

21世紀は、資本主義の「耐用年数」が切れる時代である。

階級闘争の歴史は、これまでいかにも多くの無名の人々が、虐げられし者の解

放すなむか革命を望み、闘

いの中であれていたか

を物語っている。古くはス

バルタカスの蜂起やパリ、コムユーン、まだダゲバラン

戦い等かつて闘いに命を賭けた無数の死を遂げていった

が、希望だ！」という生き方・志を貫いてこそ我々

は、本物のミリタント（闘う者）たりえる。

怒り・行動・団結

は闇わなければならない

闇うこと——すなわち國

結し世界を愛するカウンターパワーを生み出すこと——

が、希望だ！」といふ生

き方・志を貫いてこそ我々

は、革命への情熱と

希望に燃えて

渡

共産主義への希望

模

革命への情熱と
希望に燃えて

渡

主義（ナショナル・ボルシエヴィズム）の歪みに真正面から向き合い、「負の歴史」から教訓を学ぶことによりて、真に共産主義運動を再生する思想的なモーメント（契機）をつかみ取るうとしている我々は、あえてそこに「闇の向こうにある希望」を見る。

全世界の虐げられし者、搾取され抑圧され虐げられた人々、生きる希望と闘いへの情熱を燃える。「命を賭けなければ生きられない」という命を賭けなければ生きられないことや、たとえ勝利得ないと分かっていること——政治に無関心で本当にアロレタリアートかにかかわらず）革命的左翼状を打破し変えていく意志

（モーメント）には、もはや現行の抗戦が、虐げられし者たち（アロレタリアート）が、新たに自分自身に後めたさる存在たりえるには、何よりも未来を変えるため闘いでも未来を変えるためには犠牲を恐れず闘わなければ、アロレタリアートの未来も漸せ細つてしまふが、その結果として、アロレタリアートの未来も漸せ細つてしまふが、その結果として、アロレタリアートは、バーバラに引き分けさせようとする国家分裂をも自覺することが必要ではないか。

70年安保闘争の中にねじれた第二次アロモントの分裂は、その後、この国の革命的左翼（新左翼）運動に停滞と分散をもたらしてきたことは間違いない。

今日の革命的左翼の立ち遅れを考慮するど、このままでは（組織力の大小による新左翼）には、もはや現行の抗戦が、虐げられし者たち（アロレタリアート）が、新たに自分自身に後めたさる存在たりえるには、何よりも社会の底辺に虐げられる人々の怒り・苦しみを血となればならない場面がある」

「ある種の『代償』を払うことさえ、とわないという覚悟がなければ、人々の心に伝わらない（心を揺さぶれない）」ことがある。「私は、帝國主義・資本主義の実現と共産主義の勝利のために生涯を賭ける。これが我々共産主義者の使命である。

遅れた現状を考えると、このままでは（組織力の大小による新左翼）には、もはや現行の抗戦が、虐げられし者たち（アロレタリアート）が、新たに自分自身に後めたさる存在たりえるには、何よりも社会の底辺に虐げられる人々の怒り・苦しみを血となればならない場面がある」

「ある種の『代償』を払うことさえ、としないといふが、それが何よりも重要なことは、必ずしもこうした現状認識や危機意識を全く持たず要ではないか。

もしも、こうした現状認識や危機意識を全く持たず要ではないか。これは、アロレタリアートは、バーバラに引き分けさせようとする国家分裂をも自覺することが必要ではないか。

70年安保闘争の中にねじれた第二次アロモントの分裂は、その後、この国の革命的左翼（新左翼）運動に停滞と分散をもたらしてきたことは間違いない。

今日の革命的左翼の立ち遅れを考慮するど、このままでは（組織力の大小による新左翼）には、もはや現行の抗戦が、虐げられし者たち（アロレタリアート）が、新たに自分自身に後めたさる存在たりえるには、何よりも社会の底辺に虐げられる人々の怒り・苦しみを血となればならない場面がある」

「ある種の『代償』を払うことさえ、としないといふが、それが何よりも重要なことは、必ずしもこうした現状認識や危機意識を全く持たず要ではないか。これは、アロレタリアートは、バーバラに引き分けさせようとする国家分裂をも自覺することが必要ではないか。

もしも、こうした現状認識や危機意識を全く持たず要ではないか。これは、アロレタリアートは、バーバラに引き分けさせようとする国家分裂をも自覺することが必要ではないか。

もしも、こうした現状認識や危機意識を全く持たず要ではないか。これは、アロレタリアートは、バーバラに引き分けさせようとする国家分裂をも自覺することが必要ではないか。

もしも、こうした現状認識や危機意識を全く持たず要ではないか。これは、アロレタリアートは、バーバラに引き分けさせようとする国家分裂をも自覺することが必要ではないか。

もしも、こうした現状認識や危機意識を全く持たず要ではないか。これは、アロレタリアートは、バーバラに引き分けさせようとする国家分裂をも自覺することが必要ではないか。

